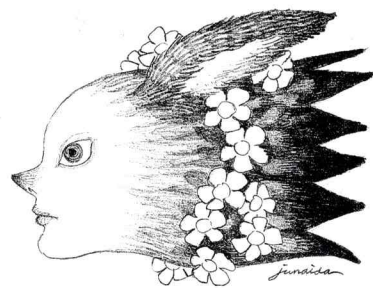


歌壇 俳壇



「日曜日のブローチ 25」 junaida

◆高山れおな選

美術展と豪華客船見に行けり (伊丹市) 保理江順子
法師蟬去りたる風のこゑばかり (東京都足立区) 望月 清彦
大花野見え隠れする獣の背 (所沢市) 高橋裕見子
鉄砲を兵士は担ぐ休暇明け (東京都世田谷区) 野上 卓
「国宝」を観たの観ないの休暇明け (京都府京丹波町) 伊藤 壽子
秋暑しすつと削る鯉ぶし (神戸市) 倉本 勉
こんなにも小さいくもの集ちさくも (宇城市) 光永 金司
山の町に秋果あふれる時来たる (小平市) 倉持 聡美
毒きのこ傘を広げてゐるところ (東京都足立区) 中村 智子
爽やかや江崎玲於奈は百歳に (加古川市) 森木 史子

【評】保理江さん。神戸市立博物館あたりか。秋高しの気分横溢。望月さん。綺麗寂びの閑寂境。高橋さん。「獣の背」というばかした言い方から不穏な詩情が生まれました。四席、五席。休暇明けも実にいろいろだ。十席。名前の誼で頂きました。

◆小林貴子選

神島の風の渦巻き鷹柱 (津市) 中山 道治
湯殿にて子規忌のうすい背を流す (桶川市) 戸室 和博
母さんのせり出している運動会 (東京都新宿区) 各務 雅憲
新米と芳ひ合ひて掌 (和歌山県日高町) 市ノ瀬翔子
海真つ平ら波を打つ葛の花 (横浜市) 木村 実
糸瓜忌の彼思ひ出し乗り越える (広島県熊野町) 中村 竜哉
眼を洗うほどの涙や秋早 (新潟市) 野澤 千恵
ドローンは敵か味方か秋の空 (東京都大田区) 石井 秀一
老いてなほ戦後の子なり大根蔕く (始良市) 楠 秀樹
俳人の吉行和子悼む秋 (倉敷市) 森川 忠信

【評】一句目、南へ渡る鷹が上昇気流に乗り渦巻く、その「鷹柱」と鳥の名が響き合う。二句目、薄い背中を流しつつ病身の正岡子規を偲ぶ。三句目、観覧席から身を乗り出して応援。四句目、新米と育てた掌とがねざらい合っていると読んだ。

◆長谷川權選

毎日が老人の日なり失禁す (福岡市) 釋 蝸硯
爽やかに近げと言ふのか特攻へ (筑紫野市) 二宮 正博
停戦へ光の方へ秋の蝶 (静岡市) 松村 史基
天皇のワイシャツ白し稲を刈る (東松山市) 高橋 清
皆老いて互ひを祝へ敬老日 (佐久市) 鶴岡 木葉
太陽の塔へふたたび秋の旅 (長野市) 縣 展子
日と月のあはひに浮かぶ虫の星 (相模原市) 井上 裕実
これほどに心づくしの秋暑とは (八王子市) 額田 浩文
きんぴらと秋の茄子の夫婦かな (越谷市) 新井高四郎
総裁も小粒になりぬ秋の風 (栃木県壬生町) あらゐひとし

【評】一席。長年鍛えた俳句の腕。こんなとき力を発揮する。二席。戦時の風潮、さらに現代の賛美者たちへの問い。どう答える？ 三席。祈りの和音。三つの言葉のハーモニー。十句目。〈千団子も小粒になりぬ秋の風〉許六。やれやれ。

◆大串 章選

戦なき戦後を生きて敬老日 (長崎市) 佐々木光博
歳時記といふ相棒と夜学かな (香川県琴平町) 三宅久美子
新酒古酒日。替りに飲む米寿かな (東京都世田谷区) 岸田 季生
大口を開けて壇輪が秋を呼ぶ (さいたま市) 齋藤 紀子
無人駅出て過疎村の蚯蚓鳴く (町田市) 岩見 陸二
老いを知り老いを楽しみ茅野行く (豊橋市) 近藤 隆三
滝の裏を登る蟻あり滑りつ (福岡市) 加藤 秀則
五千歩の一步踏み出す敬老日 (嘉麻市) 松井 春光
曼珠沙華古墳の裾に供花とも (前橋市) 荻原 葉月
秋夕。焼け友百歳の医者嫌い (佐賀市) 辻 洋子

【評】第1句。平和な時代を生き続けて敬老日を迎えた。感謝あるのみ。第2句。歳時記を「相棒」とはよくぞ言ったり。有季定型派の真骨頂。第3句。古酒にも新酒にもそれぞれ味わいがあります。しかし米寿になったら過飲はこはっとですよ。

うたをよむ 冥き遊星に人と生れて

井上 法子

今年は山中智恵子の生誕百年にあたる。近年では水原紫苑編『山中智恵子歌集』の刊行や、角川短歌五月号の特集など、歌業の再読に光が射し込んでいる。水原は「韻律に乗せて人間存在を問うことを究極まで成し遂げたほとんど唯一の人」と山中を評している。

『みづかありなむ』
苦悩や痛み、悲哀や喜び、そうした人として背負う機微は、実は一見して「わからない」ところに宿るのではない。山中の歌を読むと、そう強く感じられる。いくより生れ降る雪運河ゆきわれらに薄きたまひの鞘 『紡錘』
静謐な時空で「雪」を見据え、その「生れ」の一瞬を読み手に差し出している。鋭く燦めく「たましひ」が、鮮やかに弧を描いて、「鞘」に収まる様子を想像する。それ以外の何ものをも招き入れず、そこでしか耳にできない、金属のさ

さやかに触れ合う音。まるでそれは、この歌を読んだときに耳に残る、美しい響きのようだ。あらゆるものと向き合い、その機微を逃さない「たましひ」の「鞘」。わたしにとってそれは、短歌というこの詩型かもしれない、とすら思う。さくらばな陽に泡立つを目守りあるこの冥き遊星に人と生れて 『みづかありなむ』
言葉を以て、わたしたちの「たましひの鞘」に収めるべき光景を掬い上げ、まもりつづけること。それがこの「冥き遊星」に「人」として生まれた「われら」の美しい誓なのだろう。(歌人)

永田和宏歌集「わすれ貝」 69歳から72歳までの作品506首を収めた第16歌集。「十年をこの大学に働いて居ないあなたと過ごした十年」(青磁社・3080円)
平井弘歌集「羊をいつびき」 1936年生まれの著者による第5歌集。「ゆふづきといふ言葉はありますか争つてゐるうしろのそらです」(短歌研究社・2750円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合もあります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(通信2作品まで)。QRコードから。